

互いの良さを伝え合う「読書活動（読書力）」の開発
—小学校・授業実践と省察—

教職実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域
中村 美都子

1. はじめに

(1) 教職大学院へ進学した理由

私が教職大学院へ進学した理由は、主に次の二点である。

① 授業実践力の育成

学部での教育実習を通して私が感じてきた課題である。人間的な温かさを持った関係を周囲と築いていける子どもを育てたいというのが私の願いである。(傍線部は中村。以下同じ)

教師として子どもの前にあるとき、つけるべき力を保障できる授業実践力が必要である。

そのために、学力の系統性を考えての教材研究の力や、子どもが学力をつける支えとなる指導技術、また子どもを的確に理解し、指導方法を考えていける観察力を身につけていきたいと考えた。

② 教師としての自分の特性を見極める

子どもに個性があるのと同じように、教師にもそれぞれ個性があると考える。

もちろん学校での子どもへの指導においてもまんべんなくこなせなければいけないが、学校での教育は教師同士の連携のもとに成り立っている。その中で自分を生かしていくために、特に「これが自分の特性である」と言えることを見つけたい。

そのため、子どもへの関わり方や生徒理解の在り方、授業の中での指導の方法について、さまざまな立場の先生方から学んでいきたいと考えた。

③ 教科の専門性を磨く

先に述べた自分の特性を見つけるという点にもつながるが、教科の専門性を磨くことも大きな目的だった。私が目標としている「人間的な温かさを持った関係」を子どもに築かせていくためには、互いの考えや良さを的確に「受信」し、また、それにこたえる自分の考えを正確に、また豊かに「発信」していく力が必要である。そのためには、教科の中での系統的な指導が不可欠である。

授業の中で育成する学力の段階を明確にし、また系統的に授業を構成していく力をつけ、磨いていくことで、より子どもたちの成長を支えていけると考えた。

(2) 今後の進路

平成 23 年度から、私は愛知県内の公立小学校での採用が決まっている。2 年間の実践と省察を生かしていきたい。

2. ポートフォリオ報告の目次（全体像）

I イメージを描く

1. 教員像
2. 学校像
3. 子ども像

II 学修を振り返る

1. 学修を振り返る－1 か月
2. 学修を振り返る－2 か月
3. 学修を振り返る－3 か月

III 授業科目を横断的視点から振り返る －1 年前期修了

IV チェックリスト

V 学校サポーター記録

1. サポーター記録
2. サポーターを終えて

VI 授業科目を横断的視点から振り返る －1 年後期修了

VII 特別課題実習

1. 計画書
2. 毎日の実習記録
3. 報告書

VIII 教師力向上実習 I

1. 事前準備
2. 実習の記録
3. 実習のまとめ

IX 教師力向上実習 II

1. 事前準備
2. 実習記録
3. 報告書
4. 授業案

X 教師力向上実習 III

1. 事前準備
2. 実習記録
3. 報告書

XI イメージを描く

1. 育てたい児童像

2. 具体策

3. 理想の教師像

X II 二年間のまとめ

3. 実践研究の課題

—系統的な「活用」重視の継続的活動—

(1) 学校現場での実践的課題

①授業時間の減少への対応

新学習指導要領導入による新課程では指導すべき単元や内容が増加し、授業時間数はより窮屈なものになっている。校内の連携の強固な実習校をも含めた教育の現場では、各地域にあった特色を持つ教育活動や実践も並行して進めなければならない状況にある。新課程における子どもたちへの学力保障や地域の特性に合った教育活動の充実、小中高の系統性を重視したカリキュラム開発、それから教員の授業力向上を、学校での各種教育活動は計画的に、また効率的に進めていく必要がある。

②系統的な学力の観点の必要性

新学習指導要領の内容の充実とともに、「各教科等及び各学年相互間の連携を図り、系統的、発展的な指導が出来るようにすること（注1）」とある。教科の学習内容について、年間計画に加え、学年間の内容の系統性を持った学力の計画的な育成が必要とされている。教科を通してどのような学力育成が必要かを理解したうえで、全教科に通じる学力と各教科における学力を考え、その特性を元にカリキュラム作成をすることは重要である。

(2) 自己課題

①授業の中で伝え合う力を育てる

普段の生活の中での指導も重要だが、特に児童が多く時間を過ごす授業の時間に重点を置き、自分の考えを論理的に、また明確に表現させ、それを正確に・豊かに伝える方法を教えることで児童が互いの良さを知り、それを元に人間的な温かさを持った関係を作ることが出来る力をつけさせたい。

②教材の価値判断の力をつける

各学年・教科の、学力育成に生かすべきポイントを押さえながら、それらを基に魅力的な授業として構成するために、し、教材のもつ価値を的確に読み取り、活用しながら子どもの問題解決の力を育てることが出来る授業づくりについて考えたい。

4. これからの読書活動で求められる学力と学習過程・評価 —国語科的学力を例として—

(1) なぜ読書活動なのか

読書活動での学習における意義は、やはり、多くの子どもが楽しんで学習できるという点である。「読書嫌い」の子もいるが、そのような子どもであっても、絵本や図鑑など、文章の量が多くないものであれば関心を持って読むことができる場合は多い。子どもの興味関心に沿って題材を選ぶことが出来るのは大きな利点である。子どもが喜んで読む本には理由がある。なぜ好きなのかを自分の言葉で表現させることで、子どもは自分の生活経験を捉えなおし、自分の疑問や関心のテーマに気付くことが出来る。その後の読書では同じテーマの中で深めていくこともできるし、幅広く読ませる中で、さまざまな筆者（作者）の感性や生き方に触れたり、多様な語彙に触れる中で、自分の引き出しを増やしていくこともできる。

一方で、読書に意欲的な子どもであっても、「自分の考え」が持てない子もいる。そのような子どもたちに共通する課題としてあげられるのは、作品のテーマや筆者（作者）の考えや判断・表現を正しく読めないということである。読書経験と生活と各教科の学びとが結びついていないのだ。このような子どもたちが要る実態を踏まえながら読書活動でつけるべき学力について(2)以降で述べていく。

(2) 新学習指導要領との関わり—読書力とは—

新学習指導要領では、OECDのPISA調査における思考力・判断力・表現力などを問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があったとされることや、グローバル化の進展や知識基盤社会の到来を背景とした変化に対応していく能力育成の必要性から、言語活動の充実が重視されている。この新学習指導要領における言語活動の充実に関する基本的な考えの中では、思考力・判断力・表現力等を育む観点・各教科の指導における観点からの学習活動が求められている（注2）。

読書活動においては、これから求められる力として、図鑑や写真・記録など、様々な情報を正確に、豊かに読み取らせる力と共に、それらを自分の立場から取捨選択し、自分の知識や経験に結びつけて「自分の意見」としてまとめていく力が必要である。これら、いわば「読書力」は、「情報の主体的な理解力、判断力」そのものである。多様

な価値観や情報があふれるなか、主体的に、情報と関わり、取捨選択しながら自分の経験と結び付けていく力が必要なのである。

(3) 子どもの発達段階・関心を生かす

—読書活動の前提としての指導—

子どもの関心に沿った読書を元にした活動からの学習を有意義なものにさせるために、効果的な読書をさせるための手だてが必要である。次の二点を挙げる。

まず一つ目に、(1)で述べた子どものように、「自分の意見」を持ってない子どもへの指導として、習得学習の基本の段階である「読み方の型」を指導する必要がある。これにより、子どもは、作品のテーマに触れたり、筆者（作者）の伝えたい主張や登場人物の成長等を理解し、自分の中に取り込む準備ができる。

続いて、論理的に、自分の考えを整理し、文章等として表現する力を育てることである。「読み方の型」を使って読み取った作品のテーマや筆者（作者）の主張や特徴を、自分の知識や経験と関わらせながら、「自分の意見」としてまとめさせるために必要である。ここで「自分の意見」を持たせることは、(4)で述べるコミュニケーション能力の育成にもつながっていく。

(4) コミュニケーション能力を育てる

(2)(3)で述べた新学習指導要領で意欲や学力を育てるために、聞き取ったことから要点を抜き出し、正確に、素早くメモ・ノート化する情報の取捨選択の力と、それらから自他の意見の違いを整理して、優れた点を捉える力、要点を整理・構成して発信する力、また、効果的な発表技術を使う力が必要である。これらの力を育てるために、①子どもに観点を整理して提示し、②時間を短縮しながら③シンプルに理解させ習得させるために、学習活動の各段階において学習シートを作成し、使用させる。

(5) 学習段階—学びのステップと学習過程—

国語科における学習段階を元として、特に読書活動のための各学習段階における、つけるべき力とその具体例を、次の習得（基礎・基本）・活用1・2・評価と一般化の段階の5段階に分けて示す。

(資料1、注3)

段階	学習段階
習得	基礎学習（全ての教科の礎となる力を育てる学習） ○「情報」を論理的に読み解くリテラシーの基礎学習の段階 1.メモ・キーワードの抜き出し

	2.聞く態度や基礎（主張のキーワード・具体例、要約の技術） 3.概念・知識理解と活用の基礎（リテラシーの学習）
	基本学習（国語科の礎となる力を育てる学習） ○情報を適切に解釈し、評価することが出来る「基本モデル学習」の段階 1.各分類の図書に関する読み方の型 <u>各分類で教える読み方の型の例</u> (1)物語・小説 ①中心人物の変化（はじめと終わり） ②場面構成の型（状況設定・事件の設定・展開・発展・結末） ③描写やエピソードの読み方（心理・自然・行動描写） ④語り手の設定・役割の理解 (2)伝記・記録（ノンフィクション） ①論説文の構成（筆者の主張） ②文学的な技術（描写やエピソードの選択構成・中心人物の変化と意義） ③年表等事実の正確な記録 (3)民話・神話（伝承物語）、英雄伝説 ①中心の出来事の変化（人生や生きる知恵がテーマ） ②ストーリー展開の面白さ ③リズムカルな言葉の繰り返し ④背景の知識理解（伝統的象徴の意味） (4)ファンタジー（現代的な幻想文学） ①現実と非現実の「境界」の理解 ②中心人物の成長と変化・契機の出来事 ③特徴的な描写・エピソードの読み方（感覚・象徴性） (5)専門書（図鑑） ①論理的な文章の型 ②写真等の非言語情報の情報リテラシー（題材、表現技術、脚注からの読み取り等）
活用	活用1（分かりやすく書く力を育てる学習） ○読み取った内容の価値を自分の立場から論理的に構成する段階 1.「自分の考え」を持つ（要約・キーワード化、説明力） ・好きな場面（段落）と理由 ・キーワード化や言語化と表現 2.自分の立場や関心・興味からの「習得」の再構成

	<p>活用2 (話す力・聞く力、伝え合う力を育てる学習)</p> <p>(1)自分の考えを目的や相手・場面に応じて、的確に説明・分析・評価する段階</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.「発信」技術の基本モデル学習 2.「交流・学びあい」技術の基本モデル学習から応用へ <ul style="list-style-type: none"> ・正確に・豊かに読み解く、聞く、要約・メモする力 ・質問し、問題点を指摘する力
評価 ・一 般化	<p>評価・一般化学習 (学びの一般化・経験や生活に生かす「振り返り」学習)</p> <p>○自己 (相互) 評価、他教科や生活に生かす一般化の視点を獲得する段階</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.活動全体における学びの到達度の確認・評価 2.新たな課題を発見する学習

5. 授業実践による提案

教師力向上実習Ⅰで実習させていただいた実践をもとに、提案する。実習時の指導や子どもたちの様子から、次の二点が課題点として挙げられた。

(1) 「読み方の型」の指導

本来今回の実践では子ども自身に学習を進めさせるための準備として、「習得」部分として多様な本のジャンルについての「読み方の型」を指導する必要があった。今回子どもから出てきた分類としては、伝記 (2 グループ)、ファンタジー (2 グループ)、物語 (3 グループ)、絵本 (1 グループ)、専門書 (図鑑) (1 グループ) があり、特に、伝記と専門書のグループでは、それぞれの分類における情報の読み取り方が分からず、「自分の意見」として自身の知識や経験に結びつけられえない子どもが多かった。物語の内容の要約や、写真等の多様な形態の情報について正確に、豊かに読ませる点について課題が残った。

各分類の例となる作品と、それに基づいて作成した学習シートを使用しての「モデル学習」で継続的に「読み方の型」(例については資料1、学習シートについては資料3～6を参照)を教えていく必要がある。

②論理的な文章の書き方の指導

「自分の意見」を学習シート(資料3)欄内におさめて書くことはできたが、その中の重要な言葉のみを抜き出し、キーワード化したり、論理的な文章について指導したりすることが出来ず、そのため、聞き手にとって分かりやすい発表として構成し、効果的な発表としてまとめる段階まで到達させることができなかった。

ができなかった。キーワードの抜き出しや、根拠を提示しての意見発表などについて、授業中での発問等を通して継続的に練習させ、理解を深めておく必要があった。

論理的な文章の型をもとに、効果的な文章の構成を考えたり、キーワードを適切にまとめたりすることを通して、自分の意見を正確に発信し、相手の考えを正確に、豊かに受信、評価できる子どもをそだてていきたい。

6. 教師力向上実習Ⅰの研究授業の指導案・改訂版 第5学年1組 学級活動学習指導案

互いの思いや考えを認め合うことのできる学級づくり
ー読書活動を通してー

(1) 児童の実態

実習学級の5年生の児童は、学級目標を「協力」と定めており、また、夏休みに野外学習を控えている。クラスの友達とより密な関係を築かせるために、互いへの理解を促す必要があり、児童には互いの良さを伝え合うコミュニケーション能力が必要であると感じた。特に「書く力」「話す力」「聞く力」の三点の育成が必要であると考えた。実習校では、全校をあげての読書活動や読み聞かせが盛んで、子どもたちの関心も高い。その中でも、実習学級は、実習直前の「あじさい読書週間」で高学年向けに設定された目標を上回る児童が続出するなど、読書への意欲が高い児童が多い学級である。

また、子ども同士で自分の考えを自信を持って発言できる子が多いが、一方で話の論点をつかむことができず、互いに意見の言い合いになっている場面をよく見かける。

(2) 指導に当たって

今回の実践は、読書活動を通して、「互いの思いや考えを認め合う」ことのできる力を育てることを目的としている。

①「自分の考え」を持つ力

「読み方の型」を意識した読書を通して、筆者(作者)の考えや作品のテーマを正確に、豊かに読み取る力を育てる。また、それらを自身の経験や知識と照らし合わせながら、適切な視点を設定し、具体的なキーワードを使い、自分の考えを述べる事が出来る力を育てる。

②他者の考えを受け入れ、生かす力

グループ内での発表・話し合いを通して自分の意見と比較し、共通点・相違点を整理しながら、指摘する力を育てる。また、そこから考えの根拠

や前提条件の違いや特徴があることに気付き、自分や集団の考えを深めようとする姿勢を育てる。

③考えを発表する力

グループや学級の中で、本の魅力や本を読んだときの自分の考えや思いを発表する過程を通して、自分の考えをより他者に深く伝えるための論理的な文章の型を習得させる。また、その構成を使った分かりやすい話し方や効果的な発表の方法について考えさせる。

(3) 目標

- ①「読み方の型」に基づいて学びとったことから、自分の知識や経験に基づいた「自分の意見」を持たせる。
- ②論理的な構成を持った文章として「自分の意見」をまとめる力をつけさせる。
- ③聞き手を引きつける特色を持った発表について観点を示し、考えさせる。
- ④他のグループの発表を通して、その意見のおもしろさや、観点を示し、評価させ、自分に生かせる点などについて考えさせる。
- ⑤正確に要約やキーワード化をしながら効率的にメモする力をつけさせる。
- ⑥今後の読書活動への方針を立てさせる。

(4) 学習段階

これらの目標を達成させるため、資料1を元とした本を選んで読み、「自分の意見」を持たせる段階から、学級内でのグループでの発表会まで次のような五段階の学習過程を設定し、活動を進める。

①学習内容と到達目標

学習段階	学習内容 (到達目標)
習得	基礎学習 (普段の学級での指導として) ①聞く態度や基礎の習得(主張のキーワード・要約、具体例を選ぶことが出来る。) ②メモ・キーワードの抜き出し(適切な言葉を抜き出し、簡潔にまとめることが出来る。)
基本学習	①「読み方の型」の理解(多様な文章について、適切な「読み方の型」を用いながら読み解くことが出来る。) ②伝え合う(話す聞く)基本学習(グループ内での簡単な意見交換をすることが出来る。)
活用	発展的学習(活用1) ①「自分の意見」を持ち、学習シートにまとめる。(図書を選んだ理由や、選んだ図書を読んだ感想について、キーワード化したり、要約したり、具体例

発展的学習(活用2)	を出したりできる。) ①自分の考えを目的や相手・場面に応じて、的確に説明・分析・評価する。(自分の考えを明確に伝えることが出来る。) ②他のグループの発表の際に、自分の立場をはっきりさせながら、発言する。(自分の立場を踏まえながら、意見を発表することが出来る。)
評価・一般化学習	①学習シートにより活動全体を◎・○の三段階で評価する。(観点に従って適切な自己評価が出来る。) ②他のグループの児童からアドバイスを受けると共に、それらを適切な言葉でまとめる。(他者の意見を適切な表現・要約の元にまとめることが出来る。) 他グループの発表について、学習シートの観点に従って◎・○の三段階で評価する。(各観点に従って適切な評価をつけることが出来る。)

以下、活用学習や評価・一般化学習の段階で実習で使用したシートをその目的と、到達すべき子ども像の例をあげながら紹介していく。

②各自の意見をまとめるシート(活用1、資料3)

資料3

読書メモ	
読んだ本のメモをつけよう。本を読んで思ったこと、学んだ事などを書いてみよう。	
読書メモ	1日目
読書メモ	2日目
読書メモ	3日目
読書メモ	4日目
●4日間経ったところで… 5日目はグループのみんなと話し合いたよ。次にどんな本(シリーズ、作者、分野…)を読みたいかな? みんなにお勧めしたいのはどんな本? 考えてみよう。	
読書メモ	5日目

実習ではコミュニケーション能力育成の前段階、話し合いのもととなる読書経験を通しての「自分の意見」をまとめさせる段階で使用させた。このシートには次の目的がある。

ア. 「自分の意見」を持たせる。

- ・自分の立場から具体的に人物・場面を選ぶことが出来る。また、与えられた分量で自分の意見をまとめることが出来る。
- ・各分類の図書について「読み方の型」を基に、選んだ作品から、正確に、豊かに情報を読み取ることが出来る。

イ. 「自分の意見」をキーワード化し、メモさせる。

- ・目的に応じて、対象からキーワード（要点）を適切に抜きだし、まとめることが出来る。
- ・なぜこの本を選んだのか等（意見の根拠）を明確に伝えることが出来る。
- ・「読み方の型」に沿って必要な語句や筆者の考え等重要な点をとらえることができる。
- ・年号や数値などの事実を正確に記録できる。（専門書・図鑑等の場合）

ウ. 学習の成果を記録させ、自分の学習の深まりを確認させる。

- ・「読み方の型」を使って読み取った事実等を自分の知識や経験と結び付けて解釈し、「自分の意見」を持つことが出来る。

③グループの話し合いをまとめるシート（活用2、資料4）

実習では、個人での読書ののちに、同じ分類の本を選択した子ども同士で4～5人程度のグループを作成し、そのグループでの本の選定や発表内容を決める話し合いの際に使用させた。このシートには次のような目的がある。

ア. 情報の取捨選択・キーワード化させる。

- ・自分と友達の見解の共通点・相違点を指摘し、キーワード化してまとめることができる。

イ. 論理的な文章の書き方を習得させる。

- ・はじめ・なか・まとめ・おわりの論理的な文章の型を理解して、構成や表現を工夫しながら分かりやすくまとめることが出来る。

ウ. 項目立てと構成を考えさせる。

- ・聞き手にとって分かりやすく、効果的なキーワードの使い方や文章構成を考えることが出来る。

エ. グループの中での意見を適切にまとめさせる。

- ・自分とクラスの友達の見解の共通点・相違点を整理して、その良さ等を学び取り、自分の考えや集団の考えを深めることが出来る。

資料4

グループ発表 企画書

★グループのメンバー……

○本の種類……

●選んだ本● 「

●話すことメモ●

1. _____

○具体的な内容

2. _____

○具体的な内容

3. _____

○具体的な内容

●発表の時に気をつけること●

●まとめ●

④学級発表時の評価シート・聞き手用二枚（活用評価・一般化、資料5）

資料5（以下2枚）

評価シート(聞き手用)

●各グループへの評価を①～⑧の下の欄に、◎、○、△の三段階で書こう。

この項目は出来たかな？	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
話すこと クラス全体に伝わる声で話すことができた。								
話すこと 内容をよく理解して、よどみなく話すことができた。								
話すこと 内容が伝わりやすいように話し方を工夫できた。								
書くこと 選んだ本を明記している。								
書くこと 内容をわかりやすくまとめる事ができた。								
書くこと 要約やイラストなど、分かりやすくする工夫ができた。								

●発表したグループへ、アドバイスやよかったところなどのメッセージを書こう。

①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	
⑦	
⑧	

●発表したグループの選んだ本と内容を記録し、自分の意見・感想についてまとめる。

班	選んだ本	内容	自分の意見・感想
①			
②			
③			
④			
⑤			
⑥			
⑦			
⑧			

●自分は聞き手としてしっかり聞いていたかな？下の表に◎、○、△の三段階で書こう。

この項目は出来たかな？	三段階	
聞 く こ と	発表者の話すほうを向いて、集中して聞くことができた。	
	発表者が話している内容をしっかり理解できた。	
	内容について、自分の考えや感想を持つことができた。	
	発表グループの良さを見つけることができた。	
書 く こ と	各グループの選んだ本・内容をメモすることができた。	
	聞き取った内容をわかりやすくまとめることができた。	
	自分の意見や感想についてわかりやすくまとめることができた。	

5年1組() 番 男・女 名前()

実習では、学級での発表会の中で、③のシートを元にした各グループごとの発表をする際に、発表を聞く子どもたちに使用させた。このシートには次のような目的がある。

- ア. 段階的な観点を示し、発表する際の発表者の話し方や、発表の分かりやすさなどについて観察させ、◎・○・△の三段階で評価をさせる。
 - ・提示された観点をもとに、聞き手にとって分かりやすく、効果的な発表とはどのようなものかを考えながら発表準備をすることが出来る。
 - ・発表者の意見の要点を正確に聞き取り、適切な評価をすることが出来る。
- イ. 発表者の選んだ本や、意見の良さについてキーワード化し、メモさせる。
 - ・必要な情報をキーワード化し、短時間で効率よく記録を取ることが出来る。
 - ・クラスの友達から聞き取った情報を共通点・相違点や要点を押さえながら記録することが出来る。
 - ・クラスの友達の話に対して、自分の観点を持って聞き取ることが出来る。(また、それを元に自分の意見を述べる事が出来る。)
- ウ. 聞き手としての自分を、観点示しながら◎・○・△の三段階で自己評価させる。
 - ・聞き手としての自分の力を観点到に沿って的確に評価することが出来る。

・自己評価を基に、聞き手を意識した発表の方法について考え改善していくことが出来る。

⑤学級発表時の評価シート・発表者用(評価・一般化、資料6)

実習では、学級での発表の中で、③のシートを元にした内容をグループで発表させる際に、発表グループの子ども一人一人に記録を取らせ、また自己評価をさせるために使用した。このシートの目的は次のようなものである。

- ア. 発表時の態度や、内容の良さなどについて◎・○・△の三段階で自己評価をさせる。
 - ・自分の発表の態度や発表内容について、友達からの意見なども参考にしながら、適切に自己評価をすることが出来る。
- イ. 聞き手側から客観的に見た自分の意見の内容や感性的な表現について抜き出し、書かせたり、メモさせる。
 - ・クラスの友達の多様な考えや意見に気付くことが出来る。
 - ・自分の意見との相違点などに着目しながら友達の発言を聞き取ることが出来る。
 - ・聞き取った友達の意見を、正確にメモを取ることが出来る。
- ウ. 自分のグループの発表について自己評価させ、今後の発表の機会に生かす。
 - ・自分の発表者としての態度や発表内容について、提示された観点到に沿って、適切に自己評価することが出来る。

評価シート(発表者用)		
●自分のグループはいい発表ができたかな？下の表に、◎、○、△で書こう。		
この項目は出来たかな？ ◎○△		
話 す こ と	クラス全体に伝わる声で話すことができた。	
	内容が伝わりやすいように話し方を工夫できた。	
	他の班にはない工夫をしている。	
書 く こ と	選んだ本を明記している。	
	内容をわかりやすくまとめる事ができた。	
	他の班にはない工夫をしている。	
●聞き手のみんなからの意見やアドバイス、教えてもらったよかった点を書こう。		
聞き手の名前	意見・アドバイス・よかった点	
・		
・		
・		
●自分の班の発表の改良点・よかった点を書こう。		
5年1組() 番 男・女 名前()		

7. 実践の成果と省察、今後の課題

私の二年間の学びを通して明らかになった課題を項目立てて挙げていく。大きく4点に分け、さらに細かく項目立てしながら以下に述べていく。

(1) 学級経営

サポーター実習では、年間を通して学級での指導を学ばせていただいた。本来教師にとって学級づくりの最も重要な時期の一つである4月の始業式からの3日間から、学級にお邪魔し、学級の規律(ルール)づくり指導の流れについて観察させていただいた。本当に貴重な学びの機会を与えてくださった担当教官の先生には感謝してもしきれない。以下学んだことを二点に分けて述べる。

育てたい子ども像

はじめに述べたが、私の育てたい子ども像は「人間的な温かさを持った関係を築いていける子」だ。学級の中で、教師と子どものつながりを深めるだけではなく、子どもと子どものつながりを深めていけるような指導をしていきたい。そのために、教師として、論理的な言語能力の育成やコミュニケーションの力を育てることを通して互いの学びや疑問点を共有し、ともに解決していくような、子ども相互の学びあいが出る手立てを考えると共に、学級目標の達成を目指し、学級における継続的で系統的な学習活動に取り組んでいきたい。

計画的な指導

教師力向上実習Ⅰで、学級の特性に応じた活動や指導に割ける時間は本来必要と考えられる時間と比べて非常に少ないと感じた。教科での学習の面で、今後より授業時数が増えることを考えて、児童の成長の進度を良く見ながら計画的に、また効率的に進めていくことが必要であると感じた。学校サポーターでお世話になった先生方の一年間の流れや指導における要点の選択などの様子を振り返りながら、しっかり取り組んでいきたい。

(2) 生活指導

児童との関わりについてサポーター校での一年半を通して、実習学級の中にとどまらず、さまざまなタイプの子と関わる機会をいただいた。また、特別課題実習でも貴重な学びをいただいた。これらをまとめ、以下三点に分けて述べる。

児童理解のあり方

特に実習学級の児童と直接話をするなかで、一人一人に合わせた児童理解に取り組んできた。子どもからのスキンシップやおふざけのような声かけの中にも、時にからこちらに「伝えたい」「気付いてほし

い」という気持ちを強く感じる時があった。家庭環境や個人の成長に伴う子どもたちのさまざまな悩みや考えを受け取り、指導の中で返していくと共に、この気持ちを、教師に限らず、子ども同士でも理解しあい、共有できるような学級の雰囲気づくりを心がけていきたい。

「課題をもつ児童」との関わり

「課題をもつ児童」とされる子どもへの対応について、学級・学校・家庭間が連携して指導に当たる体制を実習校で経験する機会があった。実習学級は二年とも当該児童の在籍する学級だった。自身のおかれている環境も、自身が学級でどのような児童として位置付けられているのかも児童本人は理解しており、「居場所がほしい。“普通の子”になりたい」と悩むその姿に寄り添ってきた。初めは教室にいることも難しかった当該児童は、担任の先生や保護者の方の働き掛けの中で、現在は少しずつ学級や家庭での関係づくりを再度進めている。笑顔で学級にいる姿も、今は珍しいものではない。児童を包む私たち「大人」の対応次第で子どもが経験する学校生活は大きく変えられるのだと学んだ。

学習活動を通して、学級の中で互いの良さに触れる温かみある関係づくりを教えていくとともに、学校の内外を通して「課題を持つ児童」とされる子どもたちを支える対応についても、腰を据えて取り組んでいきたい。

特別支援児童への指導

特別支援を必要とする児童への、一般学級での指導をサポーター実習で、特別支援学級での指導を教師力向上実習Ⅲでそれぞれ拝見した。どちらに対しても共通していたのが、身につけるべき生活習慣や学習内容を明確に持ちながら、根気強く声掛けをし、指導する先生方の姿だった。比較的軽い障害を持っている子どもではあるが、現在、一般学級でも各クラス平均的に2~3人在籍しているという特別支援を必要とする子どもたちへの、個別指導とともに、学級という集団の中での指導について、先生方から学んだことを元に、取り組んでいきたい。

子どもに寄り添う指導の在り方

特別課題実習で、豊田市にある小学校にお邪魔した。豊田市は外国人労働者の方が多く居住している地区であり、その子どもたちは、学費の高価な保護者の母国語による授業が行われる専門のスクールに通うか、一般の学校に入り、取り出し学級などでの支援を受けながら学習に励んでいる。

実習ではその低学年の取り出し学級でのT、Tに入ったり、漢字の成り立ちについての簡単な授業実

践をさせていただいた。

そのクラスの子どもにとって、日本語指導は日本語を学ぶためのものではなく、学習内容を学ぶための道具だった。その点に驚かされると同時に、どんな子どもであっても、個性に合わせ必要な支援をしたり、方法を指導したりすることが学力保障につながるという点については、外国人児童の指導についても、普通学級の児童の指導についても共通して言えることなのだと学んだ。

今後現場に立った際、子ども一人一人の個性に応じて学習内容の習得のために、多様な支援ができるよう、教師として幅広い指導の在り方を学んでいきたい。

(3) 授業作りと評価

主に、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱで学んだことを中心に三点述べる。

系統的な観点を持つ

系統的に学力をつけさせる授業づくりについて二年間学んできた。特に、今回の実践である、読書活動における系統的な学力を育成する点については、貴重な時間をいただいて実践をさせていただいたが、つけるべき学力の観点があいまいだったため、子どもたちを混乱させてしまった。子どもから教えてもらった課題を、将来現場で教える子どもたちの指導に生かしていきたい。

各教科・学年間を通しての系統的な教材研究・開発の力は私にはまだないが、常に、子どもが無理なく進めていける学習過程を組み立て、教材開発をしていくことを心がけ、精進していきたい。

児童による自己評価

子ども自身に評価をさせることは、学習の観点を習得させ、また今後の自分の学習を進める中でそれらを活用させることにつながる。私は教師力向上実習Ⅰでは、子どもたちに学習の前提となる「習得」の部分や明確な観点を示すことが出来ず、手さぐりでの授業を受けさせることになり、可哀想なことをした。自分の意見を発信し、また受信してその考えの要点や良さを的確につかむ方法を教えることで、子どもたちに互いの意見を知り、交流する面白さを教えていきたい。

また、授業技術として、子どものつぶやきを授業の中で適切に拾い、学級の中に広めていけるようになりたい。

教材開発の力をつける

教材を通してのモデル学習をする際に、子どもに「習得」すべき観点を明確に示せる学習シートは必要である。教材でつけるべき力を的確につかみ、子

どもに確実に狙いを習得させるシートの開発へとつなげる力を磨きたい。特に、言語活動の充実については、各教科・各学年を通しての学力育成を視野に入れ、系統的な指導体制を提案できるようになりたい。

(4) 組織的な学級運営

サポーター校やメンター実習でお邪魔した学校の実態の観察から学んだことを以下三点に分けて述べる。

保護者との連携

(3)でも述べたが、学級や学校での児童の指導をする中で、保護者との連携は必要である。担当教員の先生の姿から、保護者から信頼を受けるためには、一人一人の子どもの様子を日ごろから観察し、その良さや気になる点をすぐに指摘できるようにすることが重要であると考え。子どもを守る「大人」として協力し合える良好な関係を築くと共に、子どもの成長を共に支えていけるような体制作りのための意見交換の機会を多く持ち、指導に当たっていききたい。

また、家庭での生活習慣や基礎的学力の定着を促す教育の重要性について発信し、子どもの学習や生活を支える環境を整えていきたい。

学校内での連携

新学習指導要領の中で、学年や各教科間における系統的な学力を示す必要性が出てきた。私は学部のころからの専攻が国語科であり、その専門性を磨く努力はしていきたいと考えている。しかし小学校では、担任の先生がすべての教科を教えることになっており、すべての教科において、上記のような系統性を考えることは一人ではさすがに無理がある。校内での連携はとても重要であると改めて感じる。実習校での先生方は、互いに研究会等で学んだことを発表し合い、研修に励んでおられた。

自身の得手不得手を理解し、現場の中で、いかにして自分をプラス1以上にできるかを、他の先生方と関わる中で考え、方針だてていきたい。

地域との連携

サポーター校としてお邪魔している小学校では、よく地域の人々が休日に学校の施設を借りて、さまざまなミニ授業を行っている。一人一人が持っている技能を、子どもに伝えるためである。また、命の授業の際には、地域に住んでいる妊婦の方がおなかの赤ん坊の心音を聞かせに見えた時もあった。読書指導の中でも、保護者ボランティアによる読み聞かせは重要な役割を担っている。

上記の三つの例はどれも地域の一人一人が子ども

を育てているという感覚がなければあればこそである。開かれた学校づくりを考えるとともに、学校の授業だけではカバーしきれない情緒の教育などで、もっと地域との方とのかかわりを深めた教育の在り方が必要だと感じた。

8. 終わりに 一教えることの喜びと重さ一

二年間の学びの中で、様々な立場の先生方から話を伺う機会をいただいた。教育に対する先生方の信念をうかがう中で、私の教育に対する信念が育て鍛えられた。目標としている子ども像「人間的な温かさを持った関係を築いて聞ける子ども」を達成させるため、人とのよりよい関係づくりを趣旨としたコミュニケーション能力をしっかりと教えられる教師でありたいということである。

実習学級での担当教官の先生のクラスの子供たちへの接し方を見せていただいて、教師として子どもたちに愛情を注ぐとはこういうことかと学ばせていただいた。甘やかすのではなく、子ども一人一人の成長を見守り、指導を通して支え、自立させることを目指す。子どもたちが教師の教えたままに育つその責任の重さをしっかりと感じながら教壇に立ちたい。

【付記】

実践は以下の学校で行った。

〈学校サポーター・教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ〉

一宮市立貴船小学校（森義朗校長）。

〈特別課題実習〉

豊田市立東保見小学校（新美隆一校長）。

〈教師力向上実習Ⅲ〉

甚目寺町立甚目寺東小学校（加藤和正校長）

一宮市立宮西小学校（時田武司校長）

稲沢市立大里中学校（林直司校長）。

尚、実習校では多くの先生方や地域の方にご指導・ご助言をいただき、大変お世話になりました。ここでは一人ずつお名前を挙げることは省かせていただきますが、お世話になりました全ての方々から感謝申し上げます。

【注記】

- (1) 『小学校学習指導要領解説 総則編』（平成 20 年 8 月、東洋館出版社）
- (2) ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著 立田慶祐監訳『キー・コンピテンシー 国際標準の学力を目指して』（明石書店 2006 年 5 月）
- (3) 佐藤洋一先生の所説を参考に中村が作成した。

【参考文献】

1. 新学習指導要領関係

- (1) 『小学校 学習指導要領』（平成 20 年 3 月告示、東山書房）

- (2) 『小学校学習指導要領解説 国語編』（平成 20 年 9 月、東洋館出版社）

- (3) 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」（文部科学省・平成 23 年 1 月）

2. 国語教育、理論と実践関係

- (1) 佐藤洋一「読書力の「習得・活用」学力・評価観の明確化から」『教育科学国語教育 2010 年 3 月号臨時増刊』（明治図書）
- (2) 伊藤清英「活用型学力」を軸にした教材開発を『教育科学国語教育 2010 年 3 月号臨時増刊』（明治図書）
- (3) 松木尚美「到達目標の明確化を一「どうぶつのおちゃん」（光村・小一）を例に一」『教育科学国語教育 2010 年 3 月号臨時増刊』（明治図書）
- (4) 佐藤洋一「戦後以降の言語教育改革への期待」『教育科学国語教育 2008 年 6 月号臨時増刊』（明治図書）
- (5) 佐藤洋一「一人学び・課題解決学習の“幻想”」『現代教育科学』（明治図書 2007 年 3 月）
- (6) 日本言語技術教育学会編『論理的な「言語力」を育てる国語科の授業』（明治図書 2008 年 2 月）
- (7) 日本言語技術教育学会編『国語学力を育てる言語技術教育』（明治図書 2007 年 2 月）

3. 実践理論・その他

- (1) 野中信行『学級経営力を高める 3・7・30 の法則』（学事出版 2006 年 4 月）
- (2) 野中信行『新卒教師時代を生き抜く心得術 60—やんちゃを味方にする日々の戦略』（明治図書 2007 年 3 月）
- (3) 笹倉剛『子どもの未来をひらく自由読書』（北大路書房 2004 年 11 月）
- (4) 東川久美子『学級担任のための読書指導早わかり』（小学館 2007 年 10 月）
- (5) 村上淳子『本好きな子どもを育てる読書指導』（全国学校図書館協議会 2004 年 7 月）
- (6) 菅原裕子『思春期の子供の心のコーチング』（リヨン社 2007 年 5 月）
- (7) 武田さち子『あなたは子どもの心と命を守れますか！』（WAVE 出版 2004 年 2 月）
- (8) 川端有子・西村醇子編『子どもの本と〈食〉—物語の新しい食べ方—』（玉川大学出版部 2007 年 1 月）
- (9) 今橋映子『フォト・リテラシー』（中公新書 2008 年 5 月）
- (10) 明橋大二『子育てハッピーアドバイス』（1 万年堂出版 2005 年 12 月）
- (11) 明橋大二『子育てハッピーアドバイス』（1 万年堂出版 2006 年 4 月）
- (12) 魚住絹代『母親が知らない娘の本音がわかる本』（大和出版 2004 年 9 月）
他多数。